

東日本・家族応援プロジェクト 2020 in むつ

村本邦子（立命館大学）

2022 年度を迎え、コロナ禍は収まる様子もないが、大学も基本的に対面授業と決まり、少し日常が戻りつつあるように感じられる。何はともあれ、忙しさが戻ってきた。相変わらずマスクははずせず、コンパも合宿もできないが、それでも学生たちは（教員たちも）嬉しそうだ。やはり、直接、場に身を置いて顔を合わせ、空気を共有するということが必要なのだろう。

11 年続けてきたプロジェクトを終え、12 年目になる今年は新たなスタートを切る。これまでは年 4 回、東北 4 県を訪れてプロジェクトを実施してきたが、今年度からは福島を中心に、9 月に一度だけ現地を訪れるプロジェクトとなる。「院生たちはどのくらい参加してくれるだろうか」と思っていたが、5 名の予定のところを 19 名の参加希望となった。そんなにたくさん一度に引率できるのだろうかと不安もないわけではないが、みんな大人だし、いろいろと工夫して、自分たちの責任で動いてもらえるようチャレンジしてみることにした（研究科からは、来年から人数制限するようと言われたが）。

昨年参加した M2 院生数人が、現地プロジェクトには参加できないが、自分たちが受け継いできたものを後輩に受け渡すと言って、研究会にボランティア参加してくれてもいる。今年のプロジェクトがどんなふうに発展的にやれるのか、とても楽しみだ。



2020 年リモートでのプロジェクト

プロジェクトを ZOOM 開催することに

しばらく状況を見ていたが、コロナ禍は収まる様子もなく、オンラインの授業にも慣れてきたので、2020 年度はすべて ZOOM でプロジェクトを開催し、最終年度を 2021 年に持ち越すことに決めた。まだ ZOOM に慣れていない人たちばかりなので、希望者とはまず練習をすることから始めた。

院生たちは今年も 19 人がメンバーとして登録してくれたので、オンラインで行うプロジェクトの参加方法を工夫してみた。例年通り、各地の担当者を決めるが、このメンバーは各地のプログラムの企画担当者となり、2~3 回の企画会議を行い、当日は運営にも関わってもらう。他のメンバーは、オンラインであることから、自分の担当地以外のプロジェクトにもすべて参加する。オンラインだと録画視聴ができるため、時間空間の制限を越えて、すべての地のプロジェクトに参加できることになる。

むつ企画会議

7 月 10 日、第 1 回目の研究会を開催、夜は ZOOM の練習がてら、ずっとむつの中心を担ってくれている杉浦さんとつないで相談した。むつでは庁舎以外は wifi がつながっておらず、ZOOM 未経験者ばかりだそう、ハードルは高そうだ。私は司法臨床の集中講義でロールプレイも ZOOM で経験し、思ったよりはるかに手ごたえがあったので、支援者支援セミナーも ZOOM を使っているのではないかと考えていたが、

現地の事情としては無理ということだった。残念だが仕方がない。支援者支援セミナー 10 年の振り返りをすることにして、過去の参加メンバーにも声をかけ、これまで扱ってきた事例の振り返りとその後のこと、十年の取り組みで何か変化があったかどうかなど成果の共有や課題の洗い出しをすることを考えた。危機に強い私である。こんな時には、次から次へと創造力が働く。

むつプロジェクトには 3 人の院生が参加してくれ、第 1 回企画会議を 7 月 19 日に開催した。これまで、プロジェクト終了後、院生たちが企画段階から関わりたかったという声があがっていたが、実際にはその時々、現地の状況に合わせて調整するため、なかなか難しく、実現できないままだった。今回は、こちらが主導でやることになるので、自由度が高く、院生たちのアイデアを反映しやすい。

みなで相談した結果、担当院生たちには、下北とむつの経過と現状を調べてまとめてもらい、それに修了生や教員が補足的に説明するということにした。8 月 4 日には第 2 回企画会議を開催、発表の担当やスケジュールなどを決めた。

東日本・家族応援プロジェクト 2020 in むつ@リモート

2020 年 8 月 28 日(金)午前「むつ・下北・青森の概要とプロジェクトの 9 年」

プロジェクト初日午前は、通常の事前学習とフィールドワークを合わせたような感じで、むつ・下北・青森について調べたこと、

過去の参加者による HP を参照してプロジェクトの 9 年をまとめ、むつ担当者 3 名に報告してもらった。

まずは院生たちが作成した資料を紹介する。

東日本家族応援プロジェクト



下北・むつについて



むつ市

特産品

イカ、海峡サーモン、帆立、昆布などの海産物
青森ヒバ、ペこもち、乳製品 など

観光名所

恐山、尻屋崎、薬研温泉、釜伏山展望台
むつ科学技術館 など

お祭り

海峡サーモン祭り、恐山大祭、大湊ネプタ
田名部祭り など



写真：ぐるりんしもき台印

恐山

比叡山・高野山と共に三大霊山として数えられ、
恐山菩提寺がある。
古くから湯治場、山岳信仰の場所として地元
に知られていた。



862年 滋覚大師・円仁(天台宗)によって開祖。
15世紀に地元の争いに巻き込まれ、寺は破却。
その後100年近く荒廃していた。
1522年 曹洞宗の僧侶が恐山の麓の田名部(現・
むつ市)に円通寺を開き、1530年恐山を再興し菩
提寺を建立した。



青森県むつ市



地理

本州最北端の市
日本で初めての平仮名の市

気候 (2018年)

平均気温：10.2℃
雪の日：131日/年

人口 (2020年8月1日)

56051人
世帯数：28796世帯
平均年齢：49.8歳



恐山一死者に会える場所一

- ・ 恐山は死者に出会える場所として昔から有名であった。
- ・ 恐山という場所に来ることにより、死者との対話が叶うと信じられていた。方法は死者の名前を呼ぶなど様々な方法があったようである。また、「大祭の日に地蔵を祈れば、亡くなった人の苦難を救う」とされていた。
- ・ イタコマチと言われるイタコが集まって口寄せすることは、大正末期から昭和にかけて広がった。
- ・ 死者を憑依させるというような霊媒は全国各地で様々な名称で存在していた。現在でも残っているのは東北と沖縄。



むつ市の歴史

藩政時代には代官所が置かれ、北前船などの海運
港路が集まる地として栄えた。

1870(明治3)年 戊辰戦争で脱軍とされた会津藩の
一部の旧藩士と家族が、明治政府により斗南藩に
移封された。

しかし、寒冷地の過酷な自然条件、火山灰台地の
荒れた土地で開墾は進まず、疫病と飢饉により多
くの死者を出した。



三戸町ホームページ

東日本大震災

3月11日

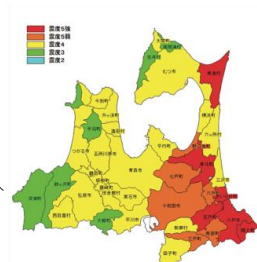
三陸沖でM9.0

むつ市は震度 4

市内全域が停電

青森県内の避難者：最大24,132人

むつ市：1896人



むつ市の歴史

1959(昭和34)年、下北の政治・経済・交通の中心として成長してき
た田名部市と、海軍から自衛隊の基地として発展を遂げた大湊町が
合併して大湊田辺市となり、1960(昭和35)年にむつ市となった。

2005(平成17)年3月14日には、ホタテ養殖等の漁業を中心としたま
ちづくりを進めてきた川内町、室町時代から続いているヒバ材搬出
等の林業及びイカを中心とした漁業等によりまちづくりを進めてき
た大畑町、鶴をははじめとした漁業と北限の二ホンザルや風光明媚な
自然を活かした観光によりまちづくりを進めてきた脇野沢村が合併
し、新「むつ市」としてスタートを切った。

1968(昭和43)年 下北半島国定公園に指定され、2016(平成28)年には
下北ジオパークにも認定される。
観光地として期待をかけ自然満喫や農林水産物のブランド化に力を
入れている。



東日本大震災

津波被害

15時21分に八戸で引きの第一波0.7mを観測

16時57分に 4.2m(観測できた最大の津波の高さ)を観測

※後日、気象庁が津波の痕跡の位置をもとに推定を行った結果、八戸で6.2mの津波
の痕跡が確認された。

人的被害

青森県内での死者の数は八戸市で1名、三沢市で2名の計3名

行方不明者は八戸市の1名

いずれも地震に伴い発生した津波によるものである。

むつ市と原発の歴史②

原子力船むつ：政府が日本最初の原子力予算を成立させていた矢先、むつ市長の「むつ製鉄」の誘致が頓挫し、代わりにこの原子力船の建造が決定

原子力船むつの建造 73億円
むつ市開港港の築港 340億
そのほか附帯施設260億
＝総額1500億円の空費

中間貯蔵施設を受け入れたら・・・
誘致による交付金で赤字解消・累積赤字の脱却が見えてくる

受け入れを決める

その後の経緯はこちら→<http://www.city.mutsu.lg.jp/index.cfm/15.1309.30.226.html>

中間貯蔵施設とは（むつ市HPから抜粋）

・使用済燃料を再処理工場で再処理するまでの間、一時的に貯蔵・管理する鉄筋コンクリートでつくられた箱のような施設

・運ばれてきた使用済み燃料は、自然に取り込まれた冷気で冷やされながら、施設内で安全に貯蔵・管理される。

一大量の使用済み核燃料は50年間保存されるが、原発が稼働し続ける限り永遠に増え続ける。保存は地中ではなく、地上の平屋建て倉庫に縦に並べられるだけ。

中間貯蔵施設イメージ図（リサイクル燃料開発株式会社提供）

<http://www.sfp.mutsu.lg.jp/index.cfm/15.1312.30.226.html>

電源三法交付金とは

「原子力発電施設等立地地域特別交付金」
「電源立地地域対策交付金」
「原子力発電施設等立地地域整備支援事業交付金」

電源三法交付金

1974年に制定され、立地地域に発電所の利益が十分還元されるようにする制度。原子力発電所のできる地元の人たちにとって他の工場立地と比べると地元に対する雇用効果が少ないというデメリットを直接的にもたらすものではないため、補償措置として交付した。

電源三法交付金の額（2020年度）

詳細な金額はこちら
→https://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/ener/gyo-riku/files/R1_dengensanpu_josetsu.pdf

むつ市（人口約5万6000人） 24億2千万円

六カ所村（人口1万人） 22億3千万円

東通村（人口約6000人） 16億8千万円

大間町（人口約5000人） 2億6千万円

1施設あたり60億円を限度とした地域振興計画の交付金（核燃料サイクル交付金）も含まれる

他の地域（水力発電）
青森市（人口約27万人）約1千万円
鯉ヶ沢町（人口約1万人）約1千万円

市庁舎の建て替え

そもその経緯

前市庁舎が老朽化が激しく、早急に工事が必要。しかし、財政難であり改修工事、建て替えの予算がない状態。

東京電力と日本原子力株式会社からの寄付金5億円が入る

市庁舎の建て替えに充てることができた

むつ市に限った話ではないが、原発関連の交付金にはリミットがある（7年）。つまり、その期間を終えると交付金が切れてしまう。

<http://www.city.mutsu.lg.jp/index.cfm/15.1312.30.226.html>

原発産業に頼ってしまう理由

原発関連施設立地条件

☆広い敷地を確保できること

☆海岸または大規模河川沿いに位置することにより大量の冷却水を確保できること

都会から離れた地域で第一次産業中心。自然に左右される。

自治体の収入安定のために、第2次産業誘致などで雇用創出する。

財政逼迫の時期に国からの誘致がある場合、第一次産業の懸念もしつつ、財政立て直しのために電源三法交付金を使う

六カ所村と原発の歴史

1969年 「新全国総合開発計画」が閣議決定され、**むつ湾小川原開発**が含まれていた。
3万ヘクタールの用地買収、1万5千人の立ち退きという巨大開発計画

1970年 県内外不動産業者による土地買い占めが続き、その規模が260人から870ヘクタールに及ぶ。

1971年 土地買収会社「むつ小川原開発株式会社」創立。土地ブームが続き、村民内民家の13%にあたる178ヘクタールが売られた。

1973年 地価が3年前の200倍になる。開発地域内から他市町村へ転移する人が出始める。また、オイルショックにより、土地ブームは終了。

結果として、巨大開発の縮小により、土地賠償などで膨大な借金を抱えてしまう・・・

売却できなかった土地に核燃料サイクル施設を建てる案が浮上する
→受け入れを決意

六カ所村にある原発施設

日本唯一の核燃料サイクル施設

・原子力発電所で度使い終わった使用済み燃料の中にある、再燃料として使用できるウランやプルトニウムを回収してリサイクルする。

・エネルギー資源の長期的な確保が可能になるとされている

核燃料サイクル施設の詳細！
<https://www.jnfr.co.jp/ja/company/facility/>

<http://www.city.mutsu.lg.jp/index.cfm/15.1312.30.226.html>

核燃料サイクル施設の現状（事故や放射能漏れ問題など）

・ガラス固化をつくる、ガラス融解炉のある小部屋で3回にもわたって高レベル廃液が運ばれるなどの事故があり、**長らく試運転が中止となっていた**。（現在は技術的な改善により再開）

・最も危険な放射能物質をあつかう化学工場（日本原子力株式会社）が、**分析、金銭をサゲている現状がある**。
→スケジュール優先という実情

・再処理工場の煙突から出る煙には放射能物質が含まれており、**風下の地域**に降り注ぐ。

再処理工場建設に最後まで反対していた菊川さんの田畑がある（菊川さんについては後に詳しく説明します）。

2020年7月29日、福島第1原発事故後の適正審査に合格したというニュースが
→<https://www3.nhk.or.jp/news/html/2020/07/29/14101232511001001.html>

東通村の原発施設

・1971年 原発用地の八割を総額200億円で買収したが、8名が拒否したため、**土地の完全引き渡しに20年かかっている**。

特に漁師の方が最後まで反対運動をしていた。

・1988年 電源三法による交付金が入り始める

・2005年 東北電力第1号が稼働

現在

実際は2号炉までしか計画されておらず、震災で号機は停止/定期点検中、2号機は稼働が未定。

今後どう使われるのか、最終処分場となるのか、土地の使い道は未定のまま

東通原子力発電所の詳細→
<https://www.tohoku-npc.co.jp/electr/genshi/safety/higashi/introduction.html>

1976年 大間町の商工会が町議会に対して「**原発立地の適否調査**」を依頼した。

1984年 MOX燃料の使用を原発誘致を閣議決定 建設予定地は130ヘクタール。

地元の方の反対運動が開始

地元住民の「**大間原発に土地を売らない会**」「**大間原発を考える会**」の反対団体発足

大間漁協と奥戸漁協が特に反対したけれど、補償金で漁業権を放棄させられてしまう

地元住民に対する買収行為により反対派に圧をかけた。

漁協補償額

大間漁協 52億円→76億円 + 漁業振興基金20億円 + フルMOX型変更で発生する不利益分22億円

奥戸漁協 28億円→38億8000万円 + 漁業振興基金10億円 + フルMOX型変更で発生する不利益分3億円



Figure 1: Overview of the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant site.

Map of the Site: The map shows the location of the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant (福島第一原子力発電所) and the surrounding area. Key locations marked include the plant itself, the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant (福島第一原子力発電所), and the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant (福島第一原子力発電所). The map also shows the surrounding area, including the city of Fukushima (福島市) and the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant (福島第一原子力発電所).

Timeline of Events: The timeline shows the progression of the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant disaster. Key events include the Great East Japan Earthquake (東日本大震災) on March 11, 2011, and the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant disaster (福島第一原子力発電所事故) on March 12, 2011. The timeline also shows the progression of the disaster, including the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant disaster (福島第一原子力発電所事故) on March 12, 2011, and the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant disaster (福島第一原子力発電所事故) on March 12, 2011.

Bar Chart: The bar chart shows the status of the plant's components. The components are categorized into three groups: 1) Components that are still in use (使用中), 2) Components that are being decommissioned (廃止中), and 3) Components that are being dismantled (解体中). The chart shows that the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant (福島第一原子力発電所) is still in use, while the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant (福島第一原子力発電所) is being decommissioned and the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant (福島第一原子力発電所) is being dismantled.

- ・かつて漁業、農業、酪農が盛んで相互扶助の生活を送っていたとも聞かず、工業化という言葉で原発の受け入れが決まりました。
- ・反対をしてもお金で解決されてしまう→人々は諦めの境地に
- ・実際、原発により経済が循環している現状があり、簡単に原発を止めることができない。
- ・それでも諦めない人達がいる
- ・軍事施設と原発が下地域に固まっている現状があり、軍事施設も原発と同様に反対ができない。

日本の北に核関連施設が集まっていると知った今、私達は何ができるのでしょうか。

☆漁師の方が特に反対運動をしていた理由☆
原発が放出する温排水により、生態系が壊れる危険があり、漁業に大きな影響を与えるからなど。

漁協内に作られた「原発対策委員会の委員長」として原発受け入れに伴う漁業権放棄に抵抗し続けた方（東通村）

→漁師の方たちは最後まで反対運動をし続けが、反対運動をしている方の高齢化や、補償金などで反対派が減っていく現実があった。



大間原発の敷地内に立つ1件のログハウス。現在は太陽光発電パネルや風力発電設備を設置し、ライフラインがなくても住めるよう整備中。

・嫌がらせのようにあさこはうすに行く道沿いには電子鉄線が張り巡らされている。

・現在は娘の小笠原厚子さんがあさ子さんのの意思をついであさこはうすを守っている

「海があれば生きていける」(あさ子さんの言葉)



六カ所村で核燃料サイクル施設建設に最後まで
反対し続けた菊川さんが作ったハーブ園。

・「チューリップ園」、「牛小舎」、「花のもり」活動を通して六カ所村の現状を多くの人に伝えている。

・「子どもたちが帰って来れないふるさとにしたいくない」(菊川さんの言葉)

あさこはうす、花とハーブの里の詳細は村本先生に話していただきます！！



9年間のまとめ

- ・毎年むつからこのプロジェクトがスタートする
- ・児童相談所職員や市役所職員など行政が中心

- ◆漫画展＆漫画トーク
◆お父さん応援セミナー
◆支援者支援セミナー
を毎年開催



漫画展&漫画トーク～むつ市立図書館～

漫画展

「木陰の物語」

児童相談所に長く勤め、様々な家族問題を解決に導いてきた国先生が
実際に扱ったケースをもとに創作された漫画エッセー
パネル展では大きく拡大し、絵巻物の屏風のようにカラー化した作品を展示

漫画トーク

物語の描ききれなかったものや
あえて描かなかったものを
スライドショー・マンガに併せてトーク



国先生：多くの人に見てもらうことが成功ではない
届いてほしい人に届くべき。少数でも構わない

会場者のアンケート

「漫画展示パネルはいろいろな自分の奥にしまっていた想いがインスパイアされるものでした」
「なんとなく見たのですが、引き込まれました。家族漫画ということで、昔風の道徳っぽい
ステレオタイプの内容かと思いきや、考えさせられる素敵なものが多く、おもしろかったです」
「先生の漫画を見るたびに温かく、せつなく、懐かしい思いになります」
このプロジェクトの精神が、見た者たちと、それを聞き伝えられた人に
永遠に活かされることを心から願っています」



初めて来た方にも、リピーターの方にも
届いていると実感



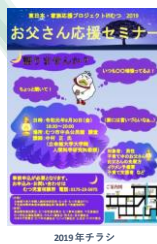
漫画展会場のむつ市立図書館

お父さん応援セミナー

子育て中のお父さんが元気になるお話が満載

- ・日頃思っていること
- ・どこかにぶつきたいこと
- ・妻にも言えないこと
- などなど、お父さんたちで語る企画

対象：子育て中のお父さん
イクメン予備軍
男性に限る



2019年チラシ

セミナーの三つの目的

- ①支援する・支援されるの関係を再考すること
- ②多職種連携の場とすること
- ③官民の連携を地域で可能にすること

対象：児童相談所職員・保育士・看護師・教師
民生児童委員・子育てNPOスタッフ・福祉施設職員等

セミナーの内容

- ・ワークショップ形式で事例検討（地元むつの家族支援に関する事例）
- ほどよい家族支援とは何かを考える
- ・所属をバラバラにした小グループで検討
- 多様な背景をもつ支援者同士で、知恵を出し合いながら
家族の力を引き出す支援のコツを学ぶ
- ・専門家に頼るだけでなく地域の力を活かす支援を考える
- 地域の人々が力を合わせて困難を抱える家族を支えるための
視点を共有してもらう

プロジェクト開始当初

参加型のセミナーに戸惑いを見せる参加者も多かった



現在

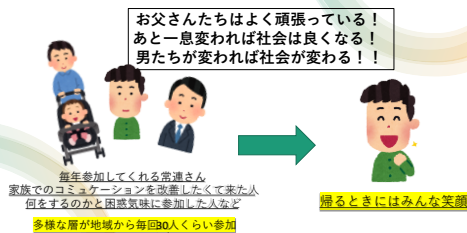
継続参加者も増え、議論の時間が足りなくなるほど意欲的な参加者も多い

むつの家族や地域の強みが
少しずつ具体的に見えるようになった

2012年 むつスタッフより

「このようなイベントを教育委員会、児童相談所、公民館、
図書館と一緒に なんてやるのは初めてだったが、むつの支援者たちが、
このようにネットワークし、むつの家族のために力を合わせることができれば、
10年後にはむつの家族が幸せになっているのではないか」

楽しい子育てをする小さなアイデアを伝えたい (お父さんのコミュニケーション教育)



支援者支援セミナー

1年目のセミナーで
むつの支援者の課題をあげてもらった

↓
多職種連携が不十分との声

地域の多職種で一緒になって事例を検討する
ワークショップをしてはと示唆したところ
2年目からさっそくその形式を取り入れてくれた

その柔軟な対応力がむつの力



昨年のセミナーの様子

まとめ

- ◆むつの行政職員が中心のプロジェクト
普段の多忙な業務や人事異動もある中、毎年滞りなく実施されている
- ◆このプロジェクトで毎年顔を合わせて参加者が仲良くなり
むつの支援者同士をプロジェクトが繋いでいる（多職種連携）
- ◆むつ市と立命館大学の協働によって続けられてきたプロジェクト
外部と連携することで生まれる新しい視点・発想
- ◆立命館大学にとっても大きな意味がある

いつものフィールドワーク代わりに、過
去のフィールドワークから私が下北のこ
とを、博士後期課程の河野暁子さんが恐山の
ことを紹介した。

下北半島フィールド
ワークから

村本 邦子



花とハーブの里 菊川慶子さん

鎌仲ひとみ監督 2006年

「六ヶ所村ラプソディー」

2004年、六ヶ所村に、原発で使った燃料からプルトニウムを取り出す再処理工場ができた。この工場の風下には農業地帯が広がっていた。賛成・反対・中立の立場の人々を取材。イギリスのセラフィールド再処理工場で、自然環境に放出される放射性物質の影響についても取材。

菊川慶子さんは、毎年、チューリップ祭りを開催し、隣接の農家たちと一緒に、再処理計画への反対運動を続けていた

あさこハウスに手紙を出す

大間原発の敷地内にあるあさこはうすには道が一本通じている。東道が南限目的地の道の交差点をはじり始めるところから、郵便配達員がこの道を通る回数を増やすことで撤去を防ごうと始められた。葉書にメッセージを書いて送ろう！

〒039-4601
青森県下北郡大間町大字大間字小奥戸 396 あさこはうす内
小笠原厚子様

・2018年1月、菊川さんを訪ね、宿泊した。薪ストーブの火を焚き、土地のものを頂きながら、お話を聞いた。

・開墾はワシントンから引揚者子どもの頃、このあたりは原野で開拓して畑にできた。集団就職でいった農外に出たが 様子が 怪しいので 帰って来てた。最初は周囲から変えることという噂が流れていたが チューリップ祭りを知めてから受け入れも変えるようになつて11年が経っていた。

・1998年、2014年村長退任、2015年村議選(無党派)に立候補。可能ならもう少しでも土地のないに遠方の子どもに多額の税金が動く日本だけが世界に勝っているのでは？と問うても長らくは決まらない。

・<https://twicop.jp/wj/open/archive/836179> (10月取材)

現在は、WWWOOF(World Wide Opportunities on Organic Farm) 有機農法の農家体験ボランティアの受け入れをされていると世界中、自分で食べるものは自分で作りたいと畑を借りて、子どもたちも無農薬で遊んでいると世界中からGWWOOFERがやってきて長期滞在するおもしろい出会いもたくさんある。ここは、初夏のつぎの場所のことを話していました。

・5ヶ月前からここへ来て、最初の夏、おがみさんが増え、疲れながらも市民生活活動なども思ったように進んでいって、ふつと自分も農家にしたいようになっていたが、こんなことになってしまった。本当は一人の時間が足りないのに、忙しくてなかなか一人になれない。もっと整理に自分の時間を生きたみたいと静かにたま息。

あさこハウス 小笠原厚子さん

熊谷あこさんは、大岡原発の用地買収を拒み、たった一人で闘い続けた、ログハウスを建てたところで、2006年急死。現在は、娘の小笠原厚子さんが、意思を引き継ぎ、あさこハウスを守っている。厚子さん自身も、2017年、不慮の事故で大怪我をしている。

[illegible]

おわりに

■暮らしのなかにも思想があり、その延長線上にごく自然な行動がある。
メアリー・スタース（スリーマイル・アイランド・アークト）

普通の子供や父親が原子力に関する専門家になる必要はない。本当に必要なのは「人間として持たなければならない当たり前の常識」だけであり、ましていくれば原子力や生態といふものにとらえられないことだ。

■ 映画『G200』『ターバーとピタゴラスとアフリカをつなぐ』後藤編
著「世界の子供と社会問題とアフリカ」人間学

311後。福島では住民の多様なコミュニティ（共有地）が次々に奪われた。地域の言葉や空間は「風評被害」で自壊するへんど委縮と後者が多い。これらは「抵抗性による公共圏の瓦解」である。ヴァーシャル、ウェールズ、ベトナム、スリーマイルで抵抗を続けていた人々とグローバルネットワークは、「途上の公共圏」を広げる営み。

ご清覧ありがとうございました



ご清聴ありがとうございました

恐山と 口寄せ文化

立命館大学大学院人間科学研究科
博士課程後期課程
河野暁子



1

三陸と恐山

■亡くなった家族が夢の中で
「これからは恐山にいるね」

■大漁祈願
春になると漁師たちが

■先祖供養
農作業の終わった 6月頃から
家族や団体が続々と

南直哉(2012)『恐山 死者のいる場所』新潮新書



5

恐山

- およそ1200年前、慈覚大師円仁によって開かれた霊場
- 宇曽利湖を中心に八峰（釜伏山、大尽山…）：八葉の蓮華
- 火山ガスの噴出する岩肌：地獄
- 湖をとりまく白浜：極楽
- 信仰と祈りの場
- 「死ねばお山に行く」

肉親の菩提を弔い、故人の面影を偲ぶ多くの人が、今もお山をめざします。そんな思いを柔らかく受け止められるよう、恐山は今後も在り続けるのです。

霊場恐山パンフレット

2

東日本大震災と恐山

- 恐山は直接の被害を受けたわけではないが、ある意味当事者だった。恐山の最も熱心な信者が住む地域が、被災地域全域だった。
- 震災直後から、開山（5月1日）と同時に犠牲者の位牌を設置できるよう準備を始めた。被災地からの参拝は無理だろうが、全国からの参拝者に掌を合わせてもらえるよう、大型の卒塔婆を建立することにした。
- 開山初日から被災者は来た。6月の団体バスはほとんど仮設住宅に住む人だった。

南直哉(2012)『恐山 死者のいる場所』新潮新書

7

「山と死者」の関係

- 個々の死者のために墓を建てるようになったのは、日清戦争（1894～1895年）以降で、それ以前は、亡骸は山へ還された
- 盆に山から祖霊を迎える風習が多く残っている
- 山の火祭り、盆の草刈り、盆路作り

柳田國男(1949)『魂の行くえ』

- 日本人の死後の観念：
霊は永久にこの国土に留まって、そう遠方へは行かない

柳田國男(1946)『先祖の話』

3

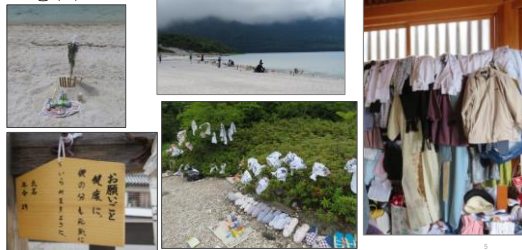
恐山（2019年夏）

40代～70代くらいの男女数名で供養塔にお供えをし、「〇〇ちゃんは高3だね」「△△は小4か」と話す。

供養塔の裏に回り、供えられている風車と石を眺め、「男の子と女の子だ」「うちと一緒に」「おらいいの分もやってくれてるな」とほほ笑み、飴玉を供えていく。



恐山



5

東日本大震災以降の恐山



東日本大震災供養塔
(2012年建立)



6

恐山



4

恐山（2019年夏）

70代くらいの女性4人。供養塔の裏にある手形に手を当てて「お父さん、ようやく来たよ」「がんばってるからね」と泣きながら声をかける。宇曽利湖に向かって「お父さん」と魂呼びをする。終わると、「名前呼んだ?」「名前で呼んだことないから、呼ばねえ」「心の中で呼んだ」と、くすくす笑いながら去る。



10

イタコの口寄せ

- 死者の霊をおろす
- 年2回
(夏の恐山大祭と秋詣り)
- テント小屋が2～3個
- 小屋の奥にイタコ
- 希望者がずらりと並ぶ
- 他の人の口寄せを周りも聞いている



11

恐山のイタコ



むつ来さい館展示より

12

口寄せ

- 東北には、イタコ・ゴミソ・カミサン等々と呼ばれるシャーマンの職能者がかつて多く存在し、病氣や生業の相談、死者の霊を呼び寄せる口寄せが行われてきていた。

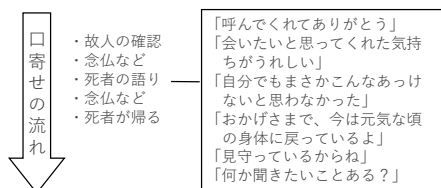
佐々木宏幹(1984)「シャーマニズムの人類学」弘文堂

- 宮城県においては、葬式の後、遺族の女性たちを中心に、かつてはオカミサンと呼ばれる巫女を家に呼び、「口寄せ」という、死者が巫女に憑いて遺族に語る儀礼を行っていた。

川島秀一(2018)「災害死者の供養と伝承」高倉浩樹・山口睦編『震災後の地域文化と被災者の民族誌 フィールド災害人文学の構築』新泉社

14

口寄せの流れ



13

口寄せ研究

- 柳田國男(1913)「巫女考」
①神社に属する者 ②神や死者の言葉を仲介する者
- 「オシラサマ信仰」→大正～昭和期に研究が盛んに
巫女がオシラサマを奉祀 「オシラアソバセ」
- シャーマニズム研究として (佐々木宏幹 …)
- 社会的存在としての巫女:「民間の知」 (川村邦光 …)
- 精神医学的視点 (藤井博英 …)
- 恐山のイタコ→メディアの影響 (1960年代～)

大道晴香(2017)「イタコ」の誕生 マスメディアと宗教文化 弘文堂

15

東日本大震災と口寄せ

- 夫を亡くした女性
最初にオガミサマを訪ねた時、「男の人も一緒に入ってきたよ。心配でしょうがないって」と言われ、夫だと思った。

- 娘が行方不明の女性
何人もの遺族と同時に会うオガミサマ。女性がなぜ娘が出てこないのか尋ねると、「顔に傷がついているから見せられないけど、いつもそばで見ています」とオガミサマが言う。「いつも隣にいたんだったら、父ちゃんとさっぱりいいことできねえやろか」と言って、みんなで泣き笑う。

奥野修司(2017)「魂でもいいから、そばにいて 3・11後の霊体験を聞く」新潮社

16

東日本大震災と口寄せ

- 妻が行方不明の男性
恐山のイタコに「何かに挟まれて身動きできない。探さなくてもいい」と言われたが、諦めきれずに捜索を続け、震災から7年9ヵ月経って妻の遺骨が見つかった。

(朝日新聞, 2019.3.12)

- 夫が亡くなった女性
震災以降、年に一回弘前市のイタコを訪ね、夫と話すのを楽しみにしている。一昨年の口寄せで夫が自分の名前を呼び間違えたので、自分を忘れてしまったのかと思い、去年は口寄せを頼まなかった。今年の口寄せで夫が名前を呼び「なんぼ仏になっても、お前を忘れることない」と言った。夫の気持ちを確かめられた。

(NHK仙台, 2019.2.23)

17

死者論

- 私たちは、ときに触れ得るかと思うほど、死者が近くにいるのを感じることもある
- 死者からの呼びかけを「聞く」こともある
- 五感に訴えるものに世界を限定した科学が支配する現代においては、死者の実在を信じることは難しい
- 一方で、五感を超える何かがあることを、強く感じている
- 私たちが死者との関係を否定しなければならない理由はどこにもない

若松英輔(2012)「魂にふれる 大震災と、生きている死者」トランスビュー

18

三陸の死生観

- 明治29年(1896年)、昭和8年(1933年)の大津波
→わずかな生存者だけで、村のほとんどの人が亡くなる
- 「板子一枚下は地獄」→船乗りの危険
- 海辺の村々 →家族を海で亡くしている人多い

海で生きる⇒死というものに近い

黒田清一・赤坂憲雄(2012)「東北の震災と想像力- われわれは何を失ったのか」講談社

19

まとめ

- 「災害→心のケア、グリーフケア」と支援者はケアしたが
⇒その土地の悼み方、弔い方、作法があるはず
- 共時的な死者と生者
実存する死者との紡ぎなおし ⇒西洋との違い
- 災害をくり返し経験してきた地域 ⇒困難を乗り越える土着の知

20



2020年8月28日(金)午後「支援者支援セミナーを振り返る」

午後は中村さんがファシリテーターとなり、これまでの支援者支援セミナーを振り返り、今後を見据えて、これまでの成果や課題を確認するセッションとした。現地からは、むつ市児童相談所の杉浦さんと高木さん、むつ市子育て支援課の半澤さんと藤田さんが、立命館からは、中村、村本の他、修了生の真鍋さん、神山さん、野池さんが登壇する形を取り、プロジェクトメンバーが参加した。

初めに中村さんがセミナーを振り返り、ポイントを確認した。

「公的な仕事を持った人、保健師さん、学校、幼稚園、保育園の先生、就労支援に関わる人、弁護士など、子育て支援や家族支援に関わるのある人たちなど、多様な職種が集まってグループディスカッションをしてきた。公的機関は虐待として捕捉してくる可能性が高いが、実際には子育て支援として、民生委員や保護司や裁判員など市民参加があらゆるヒューマンサービスにつきまとう。プラスもあればマイナスもあるが、地域に

行けば行くほど、こういう人たちの力量アップが必要になってくる。援助援助していない日常的に関われる人たちを重視する。

このセミナーの特徴は、事例検討としてやっていること。通常的事例検討はおもしろくない。発表する人が緊張して、いろいろ言われて神経をすり減らすものだが、楽しい事例検討会を工夫している。いろんなことが話し合われることが重要。

毎年、ひとつかふたつ事例を出してもらい、ジェノグラムを書きながら、時間経過に伴う家族の動態がわかるようにする。地域でやっているのでエコマップも重視する。そこには支援者も当事者として登場する。公的機関は、ある種の権力を持って入ってくる。家族システム論に支えられながら、やや構造化して捉えることになっている。さらにジェンダーの話も出てくる。概念の紹介もする。目指すべきは地域の力、場の力、多職種連携。役に立つというより、やってよかった事例検討会。

どんな事例を出すかを地元で練ってもらい、杉浦さんが調整してくれ、事例提供者と対話しながら、ディスカッションをしてもらう流れ。グループワークが重要で、一方的に話をしない、評価しない、傾聴するなど、対話しながら協働する。主役はむつの家族。そこでは院生も重要な役割を果たしている。グループに入り、若い院生は息子や娘のポジションになり、社会人は他職種の視点を持ち込んで貢献してもらった。」

むつプロジェクト「支援者支援セミナー」をふりかえる



- ① 支援者支援
- ② グループワーク
- ③ 事例検討
- ④ ジェノグラム
- ⑤ エコマップ
- ⑥ 家族システム論
- ⑦ 地域(場)の力



支援者支援セミナー：村本さんと中村が進行。
地元の事例提供者と対話しながらむつの家族を題材に、
関生も積極的に参加。

次に、杉浦さんが、現地から見たセミナーの意味を話してくれた。

「このセミナーは復興支援を目的とした立命館の取り組みの一環として始まった。2011年、団先生に、『こんな時だからこそ漫画展やりませんか』と個人的なメールをしたことをきっかけに、村本先生から『せっかくだから漫画展プラスα、いろいろやろうよ。何して欲しい?』と思いがけない話を頂き、その勢いに圧倒されて、それならば、児童相談所職員という立場としての私を含めた子育て支援、家族支援に関わる人たちを元気にするセミナーをとオーダーした。10年やるよという言葉にのせられて、続けてこれただけでも感無量。

むつは被災地ではなく、関係者たちに、『どうしてむつなの?』と聞かれ、毎回説明するのも面倒になってきた。むつの開催趣旨として、『災害に限らず誰にでも起こりうる家族の災難を乗り越える地域の家族力の向上』というところに視点を置き、毎年人事異動で人が変わるたびに、上司や関係機関に説明してきた歴史がある。

効果を問われてもなかなか回答は難しいものだったが、プロジェクト全体に言えることとして、毎年最初の開催地として開幕のテープを切ることで、その後に続く被災各県で開催することを牽引する役割を担っ

てきたのかなと感じている。サブタイトルにつけた『本州のてっぺん下北半島から家族の笑顔を』もそういう意味。

あらためて現地から見たセミナーの意味を考えてみると、地域で暮らす家族に寄り添う支援者が連携するネットワークを育むこと。単発の研修で終わるのでなく、長期にわたって継続してきたからこそ言えることである。連携というキーワードはよく出てくるが、個人情報の保護などと言って、連携が図りにくい時代になってきている。面倒なことに関わりたくないという時代で、関係機関も隣は何をする人ぞという状況。

児童虐待等の事件が起きるたびに、関わった支援機関や担当者が批判にさらされる。後になってから、そう言えばあの時という情報が報道される。一生懸命な支援者ほどショックは致命的。セミナーでこの地域の実例の事例を取り上げることで、地域の問題に気づいてもらい、もし自分が関わっていたら、地域でどう関われるのか、私たちの地域にどんな社会資源があるだろうかなど考えてもらう機会になったと思う。

グループワークをすることで、当事者感覚で考える機会が得られ、自然と顔の見えるネットワークができるということも期待できた。地域の社会資源をいかすには、地域で関わっている関係機関を知らなければならぬ。最初の頃は、民生委員、保健師、教師、保育士といった子育てに関わる支援者が集まっていたが、子どもの問題を取り扱う家族のなかに障害者やメンタルな問題が出てくると、さらに多職種の連携が必要となり、おのずと関係職種が広がっていった。

2015年には、障がい者生活就労支援センターから事例が出た。この時一番喜んだの

は事例提供者の職員で、以来、この事業所からは毎年数名の職員がセミナーに派遣されてくる。セミナーで本当の地域支援ネットワークを体験したと言う。障がい者の支援ネットワークが広がらない根底には地域の障がい者への理解が乏しいためだと嘆いていた。地域の支援者たちがそれぞれの立場で隣人を理解して寄り添う。そんな地域になったらいいなと。そんなことが見えてきた矢先にコロナで足踏みすることになったのは残念。

育むという意味で、終わらせてはいけないと思う。事例のほとんどが、むつ市の要保護児童対策地域協議会で取り扱ってきた事例なので、事例提供してきた方々からも話してもらおう。最善と考えることをやってきたが、セミナーで検討すると、また新しい視点がある。苦しさも再現されるが、セミナーで『よくやっている』と評価してもらうことで救われることもある。やって当たり前、評価されることの無い仕事なので、励みとなった。」

次に子育て支援課の藤田さんから。

「提供してきた事例は、参加者が身近なものと感じられるよう、地域の支援機関が関わった事例を意識してきた。取り上げてきた事例は、ひとり親家庭、親が精神疾患、知的障害、経済的困難、支援者がいないなど、課題が複合するなかで子育てしている家庭をとりあげてきたことに気づく。ふだん関わるのはこのような事例がほとんどである。だからこそ、地域との支援機関との関わりが欠かせない。それぞれの知恵を出しながら考えていく。回を重ねていくことで、地域にはいろいろな支援機関があること、地域

力が向上していることを感じる。」

それから、子育て支援課の半澤さん。

「3年前にこちらに来て、子育て支援が何かもよくわからないままで、当日まで参加するつもりはなかったが、事例担当者ということでひっぱりだされてマイクを持たされた。いろんな事例検討会に参加はしていたが、自分でマイクを持つことはなかったので、いつもと違った。事例で説明したことから、みなさんがグループで話し合うのを見るなかで、他の人の意見を通して自分のことにも気づく。

ニュースに出てくるのは遠い話だと思うかもしれないが、むつ市の事例を取り上げることで真剣に考えてもらえる。こんな濃いケースが田舎のむつ市にあるんだと知ってもらうことも、こういう機会でなければなかったし、むつ市独自の目線で、独自の支援が見えたと思う。事例を出すのは大変だが、得られるものも大きかったと思っている。

実際に関わっているケースでは、各機関の思いがぶつかるので、怒りがぶつけられることもあるが、事例検討として客観的に見てもらえると、『大変だったね』とねぎらってもらったり、『むつの力すごいね』と言ってもらって、そんなこと思ったこともなかったのが驚いた。

1年目、会場に支援者がびっしりいるのを見て、むつにはこんなに支援者がいるんだと思えたことも大きかった。直接的支援者だけでなく、母にメンタルな問題があるとなると、さらに関係者が広がっていく。いろんなケースでこんな参加者がいる、こんな支援者もいるんだよと知る良い機会だった。

たと思う。」

続いて、立命館の修了生たちが話した。一番バッターは真鍋さん。

「2014~2016年にむつのプロジェクトに参加し、現在は、きょうとNPOセンターで市民活動の間接支援をしている。NPOの基盤強化とともに、行政や企業と対等なパートナーシップを築くための環境整備。京都市の市民活動総合センターで、市民活動をしている人々への相談機能やコンサルティング、サポーターの派遣などもしている。

振り返りながら、今やっている仕事とのつながりを考えてみた。むつのなかで活動している多職種の支援者が一同に会してディスカッションすることに、当時は難しさを感じていた。それぞれ視点が違い、どうまとめたらいいのか。今の仕事でも、どこでもそれは見られて、だからこそ違う視点をどう総合していけるのか、地域の力、場の力をどう引き出していけるのかが問われる。

『NPOは借り物競争だ』と言われるが、どこに地域資源があるのか、うまく借りていくことが重要。地域の資源をエコマップにして、地域の力をうまく結集させてよりよい結果を出す。

院生としてホワイトボードでビジュアル化したり、グループワークに入ってファシリテートするのだが、M1で知識もスキルもないなかで不安に感じながら参加していたが、何も知らない青臭いやつが入ることが大事だったと思う。支援に従事している人だけだと、前提が思い込みでずれていく。中村先生から『息子として入る』とあったが、地域の支援者たちが、息子に教えるように言葉が柔らかくなったり、丁寧に説明して

くれる。そんな役割を演じることも、実際の現場で経験できてよかったし、今につながっていると思う。」

次に昨年参加した神山さん。

「神経内科、脳外科で看護師を経験して、大学院に入る1年前から精神科病院で働き出した。現在、精神科デイケアにも行き、リワークなどにも関わっている。ボランティアや災害支援の経験はなく、仕事としてただただやってきた。多職種連携ということに興味を持って、むつのプロジェクトに参加した。

セミナーでは、グループに分かれて多職種で話したが、その立場だからこそ見えてくることがあり、勉強になった。セミナーのやり方がリスクアプローチでなく、良い部分を引き出していこうとなっていたことが今の仕事にも参考になる。リスクだけに眼がいきがちだが、そこで学んだことである。

セミナーが終わってドライブした時に、関係者と話していて、支援していた方の玄関に雪が積もって入れなかった話を聞き、支援するにも土地ならではの特徴ややり方があり、土地を知ること大事なのだった。何も知らない自分たち院生で大丈夫かという不安はあったが、その土地の者ではない私たちが入ることで、そこで当たり前のことが新鮮だったりするので、いいのではないかと思った。

職場では、多職種連携を言っても、実際には縦割りで、眼に見える形で連携が想像できないことが多いが、実際には見えないところでもつながっていることもあり、そういうことが想像できるようになるといい。見える範囲だけでなく、支援者がいること

を想像しながら関わることも大事だと思った。」

最後に、一期生の野池さん。

「京都で町づくりに関わり、後方支援の仕事をしている。震災当時はきょうと NPO センターで働いており、阪神大震災を経験した後に NPO 支援センターを作っていたので、2011 年の時には、そういう経験をいかせたらと、現地にボランティアを京都から派遣する災害ボランティアセンターをやった。公的にはできない支援、たとえば、アレルギーやペットなどの問題も各 NPO と連携し、京都に避難してきた人々の受け入れや支援の仕事もした。離れているからできることをと、このプロジェクトの話を聞き、当時は資金的な支援をした。京都や関西で今を伝える意味で漫画展もやった。

当時は人を送っていたが、間接的、後方的支援に関わるなかで、もっとお金の支援ができるのではないか、お金も大切なことだと気づき、今は、クラウドファンディングを使った経営を支える資金調達をしている。震災を経て、思いを持った人たちがたくさんいることがわかり、一人ひとりが少しでもお金を束ねて資金として提供する事業である。宮城県でコミュニティ財団法人の設立の支援をし、795 のプロジェクトで 16 億円を寄付する寄付型投資を行った。地域のなかで支えあうお金を出すことも大事ではないかと思う。

応用人間科学研究科の一期生なので、当時は卒後十年目、十周年記念で校友会役員として応援したが、現在、学校法人立命館の RIMIX にも関わっている。立命館が東日本やコロナで学んだことを社会に活かすプラ

ットフォームにも関わっている。」



下北でも子育て支援は続き、立命館でも支援者支援は続く。私たちは危機とともに生きていくしかない。院生たちもむつの取り組みから学んだことを、それぞれの人生に活かしている。ひととおり発言したところで、中村さんが、「十年間取り組み、経験の言語化を行った。来年度以降どうするのか？」と問いかけた。

今年度初めてのむつ市児童相談所の高木さんは、「昨年まで中核市として人口の多い八戸児童相談所にいた。むつは、支援できる場所や機関がどうしても少ないので、地域の力をいかさなければ大変だと感じていたところだった。こういう形で顔を合わせることで、ここにこの人がいると共有できる場だったのだろうと想像する。今後も続けていけたらと思うし、この取り組みを他の児童相談所にも共有できたらいいのかな」と言った。

杉浦さんは、「今年で退くことになっているので、来年以降が気がかり。今日の話を聞いて、あらためて地域で続けていく価値が

すごくあると確認し、ここで終わりにしたくない。形を変えてでも、育む活動は続けていけるはず。コロナで来年できるという確証はなく、むつのリモート環境が整っていくとできるのか、どういう形でなら続けていけるのか見えないところもあるが、とにかく続けたい。」とのこと。

藤田さんも半澤さんも、院生たちの話をあらためて聞いて、新鮮だったという。民生委員のおせっかいな言葉を院生たちが受け留めていることに感動したし、大学で学んだことを社会に出ても続けていることに感心し、これからも頑張りたいと励ましがあつた。

団さんからは、このセミナーと自分自身がずっとやってきた家族理解ワークショップが相似形であることを前提に、「人も状況も変わっていくが、大事なことは持続させることである。それには、継続のための意志が必要。そこには予算も含まれる。弘前では参加者負担で20年やってきたが、退職したからと言って参加できなくなるわけではない。自分が地域住民としてどこに使命を感じるかはその人に属する。支援者支援というのは、必要な時に誰かに助けてもらえるということ。大きな予算を組まないといけないことはなしにして、むつで十年続いた。すでにある。一から立ち上げるより、ずっとやりやすい。意志があれば続けられる」とエールが送られた。

あらためてこのセミナーの意味を確認し、是非継続して欲しいと思う。

2020年8月28日(金)午後「次年度プロジェクト企画委員会」

続いて、むつ市児童相談所の眞手さんを司会に、次年度プロジェクト企画委員会ということで、話し合いの場を持った。現地からは、むつ市児童相談所から眞手さん、杉浦さんを含む3名、むつ市子育て支援課から2名、むつ市PTA連合会長会長、むつ市立図書館から1名の計7名が、立命館からは教職員4名と、院生、修了生9名が参加した。

支援者支援セミナーについては、現地では、最終年もこれまでどおりにと話しているとのこと。関わってきた人たちから、十年続けてきて、やっただけの成果があつたというので、方針として続けようとしているが、どういう形で続けるのかは要検討。市役所(子育て支援課)からは、児童相談所とも相談しながら、要対協(要保護児童対策地域協議会)の組織を活用して継続できればいいのかなという案が出ている。緊急事例ではなく、一定、時間の経った事例を扱う方がいいと思うが、確認をすると、参加メンバーもこれまでとそれほど変わらないだろうとのこと。ファシリテーターを育てるような企画があれば、地域で継続していけるという声もあがつた。

団さんから、「効果を示せと言われれば何とも言えないが、続いているということは意味があると思われているということである。どのような形で続けられるか、うまくいっていないこれまでの委員会の形に重ねるのではなく、この形でやっているものを続けることを考える方がいい。誰かによって行われるものではなく、みんなで続けるも

のに頑固にならないと何も生まれない」と助言があった。

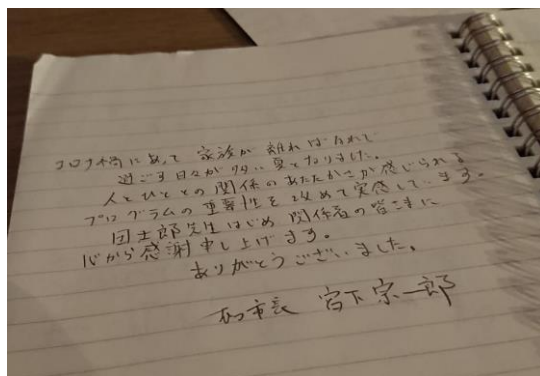
お父さん応援セミナーについては、むつ市関係者たちから、「単にお父さん同士で話すより、中村先生の話聞いて、そこから実際にやってみて体験することから何かが生まれていると思う。最初は、動員されてきた人や立場上やむを得ず参加する人もなかにはいるが、終わった後にはみんな笑顔で帰っていく。家族のことや自分のことを考えるきっかけになっている。会場での熱量もすごい。普段は話さないような見ず知らずの人とも話していると見ている。20人から30人のお父さんでやっているが、今の形がすごくいい形だと思う。ひとつの問題点は、どうやって興味を持ってもらって集まってもらうかということだけだと思う」とのことだった。

中村さんからは、「むつの男たちに通用するかなと思いながらやってみたが、結構ノリがいい。どちらかと言えば学校の先生たちは少し硬いかもしれない。気になっている点は、去年の参加者のなかに深刻な夫婦問題を抱えていた人がいた。京都や大阪では男性相談があるので、個別のニーズはそちらへことができるが、むつではそれができないので、男性問題として大きなテーマがあると感じている。来年が最後とすれば、来年は女性も含めてやってもいいのかなと考えている」とのことだった。

私からは、「是非、むつのなかからファシリテーターや男性相談やってみようという人財が出てきて欲しい。これまで種をまいてきたものが、むつでどう育っていくのか。そのための支援はいくらでもしま

す」と伝えた。

漫画展、漫画トークについては、十年以降も図書館で開催すると言ってもらっている。毎年評判がよく、今年も市長が来て、感謝の言葉とともにアンケートを書いてくれたとの報告。



中村さんからは、「パネルはたくさんあるし、すべて見たと言う人は少ない。コンスタントにやってきたのがむつ。プロジェクトのひとつの形としてやれるだけやってもらえたらというのが作者としての希望。トークは ZOOM でもできる。コストかからないし、人を集めなければならないということもない。」

杉浦さんから、「来年のコロナ事情がわか

らないが、5月の実行委員会の時点ではリモートの可能性など考えもつかなかったが、あらたな可能性も見えた。環境面も含めて検討していきたい」ということだった。

参加院生たちは、かなりのエネルギーを注いで事前学習をし、議論しながら準備していた。ある院生は、「今月はむつにまみれて青森漬け。楽しかった」と言っていた。そうやって調べたことを、直接現地の人々の声を聴くことで、自分の中に落とし込むことができたという。「やって当たり前のことが認められる」「むつにこんな力があつたんだ」「十年間続けてこられて感無量」など、むつの声を直接聞き、「9年の歴史があつて今がある。普段の生活では気にしないことが、プロジェクトで地域について学ぶことで、自分の日常を考える。育ってきたセミナーなんだと実感した」という。

また、現役院生にとっては、修了生たちがプロジェクトの経験を現在につなげていることにも感銘を受け、M1で何ができるのか不安に思っていたが、逆に知らないから活性化されるものがあるという話で自信が持てたようだ。



2020年8月29日(土)午前「漫画トーク」

漫画展に関しては、今年も、むつ市立図書館にて、8月11日(火)～8月30日(日)に開催してもらった。



漫画トークは公募もしたので、むつ市と立命館の関係者以外にも15名ほどが申し込み、はじめてZOOMで31名で行った。

今回は、来年展示予定の漫画「アースカラーの物語」「ソロ泊」の二点が紹介され、それぞれ感想を述べ合ってから、作者が思うことを述べるという形式をとった。通常は隣同士の2～3人でバズセッションをやっているが、ZOOMのブレイクアウトルームの機能を使って2～3人で語り合ってもらった。これはとても新鮮だったようである。今回の一般参加者は、これまでの継続参加者や、もともと団さんを知っている青森在住の人が多かったため、院生たちにとっては現地の人たちと直接触れ合う貴重な機会と

なった。

アンケートの感想には、「久々に団先生のお話を聞けて、元気なご様子を見ることができて、参加できて良かったです。頭と気持ちが活性化する楽しい時間でした。」(50代、女性、5回以上)。「いつもの漫画トークが自宅に居て受けられる新鮮な感覚を楽しみながら参加できました。ご支援ありがとうございました。また、リモートだから参加できた人もいることから、こんな形も良いなあと思う反面、うちのグループで聞いた話や他のグループから出た話題等、同じ会場であれば、漏れ聞こえたり、共有できたかなあと思いました。参加者全員の顔や反応を間近に感じるには、やっぱりリアルトークだと思いました。」(60歳以上、女性、5回以上)。「回を重ねるごとに『へー、そうなんだあ』から『うんうん、わかるわかる、そうだよね』になってきました。時代も、人も、そして自分も変わっていているということを毎年この企画に参加することで実感しています。」(50代、男性、5回以上)。「Webだからこそ参加できました。また機会があれば参加したいです。」(40代、男性、初めて)など評判もよかった。



初めてリモートプロジェクトをやって

今年はコロナ禍により、院生たちを現地に連れていくことができず、現地の方々と一緒に交流することもできず、とても残念だったが、リモートならではの良さも発見することができた。プロジェクトの参加院生たちは、通常一ヶ所の現地に赴き、行ったメンバーの報告を聞いて学ぶという形をとってきたが、今回は、むつのチームメンバー以外の院生たちも参加することができた。ただ報告を聞くより、コミットできる参加となり、学びも深かったように思う。わずかではあったが、むつの方々のお顔とともに声を聴き、ブレイクアウトルームで短時間でも交流し、パソコン越しであっても生きた出会いができた。リモートであったからこそ、過去にプロジェクトに参加してくれた修了生たちも参加しやすく、先輩たちとの交流は院生たちの励みになったようだ。

もちろん、その土地に身を置き、人々と出会い、身体レベルで時空を共有することから得られるものには代え難いものがある。その分、「来年は是非むつに行きたい！」という声があがっている。来年は院生たちとともに訪れることができることを願う。